

第4回

「意見」と「意見文」

監修

井上志音

家庭や学校といった身近な生活上の課題から、地域や国家の課題にいたるまで、実社会にはさまざまな課題が存在します。そうした課題に対する自分の「意見」を「意見文」として書き表すとき、どのような点に注意すれば説得力を持たせることができるのでしょうか。今回は、意見と事実を区別しながら、「序論―本論―結論」という基本的な構成で意見文を書き、推敲を通じて意見の説得力を高めていくことを学んでいきます。

学習のポイント

- ① 意見と事実を見分けよう
- ② 論理的な文章構成とは？
- ③ 意見文を書いて推敲しよう

事実と意見を見分けるゲーム

意見文を書く前のウォーミングアップとして、事実と意見を見分けるゲームを行います。確かに、事実と意見は視点によって変わることがあり、明確な線引きは難しいものです。しかし、何か意見を伝える際には、社会的にどういったものが意見と認められるのか、そして意見にどのような事実を組み合わせれば説得力が増すのかを知る必要があります。例題では「富士山の標高は3776mだ」が事実で、「富士山は美しい」が意見としましたが、前者だけでは意見になりませんし、後者だけで完全な意見かという説得力に欠けます。事実を根拠としてどう使うか。ここに皆さんの意見の説得力を高めるカギが隠されています。

チャレンジ：「序論―本論―結論」という構成で意見文を書き、推敲しよう

事前レクチャーを念頭において、二人は次の三部構成で意見文を書いてきました。

序論…問題を提起する

本論…問題を検討し、展開する

結論…自分の考えをまとめる

序論で、アイビーさんは「犬や猫の飼育放棄」をテーマに問題を提起し、犬や猫にマイクロチップを装着することを飼い主に義務付けることが、飼育放棄を防ぐという結論を導きました。ただ、その結論にいたるまでの本論の展開部分で、論理の飛躍というワナが潜んでいました。

本論で意見を展開するためには、第2回「この説明で分かりますか？」で学んだように、相手の立場に立ちましょう。相手に伝わる文章に仕上げるためには、推敲し文章をねり直さねばなりません。その際のポイントは「**事実**に理由づけする」ことです。

結論が先に頭にある私たちは、つい都合のよい事実をそのまま根拠にしがちです。しかし、事実は理由づけしてはじめて意見の根拠となります。「なぜ雨が降ったら、うれいいのか」、「なぜ飼い主にチップ装着を義務づければ、飼育放棄の防止につながるのか」。相手の視点に立つた、ていねいな事実への理由づけが、意見の説得力を高めます。

説得力の向上は相手を論破するためではなく、互いの意見を正しく理解し、尊重して認めるためのものです。意見とはそうした関係性のなかで醸成されていくのです。

エッセイ

番組こぼれ話 「意見を吟味する」

井上志音

今回、番組で「意見を述べることは差し出がましいことではない」という話をしたが、実は語りながら脳裏に浮かべていた言葉がある。「吟味思考（クリティカルシンキング）」である。

ちょうど番組内容を考えていたころ、坂本旬・山脇岳志編著『メディアリテラシー…吟味思考を育む』（時事通信社、二〇二一）という本を読んでいた。本書は、クリティカルシンキングの訳語を「批判的思考」にすると、相手の意見を否定・批判するかのような誤解を讀者に与えることから、あえて「吟味思考」という訳語をあてている。なるほど、クリティカル語源はギリシャ語「κρίνω」（見分ける・判断する）なのだから、相手の意見をじっくり確かめ、価値判断をしていくような思考プロセスを「吟味思考」と名付けた筆者のねらいにはうなずける。そう、意見をやりとりする際に大切なのは吟味することなのだ。

番組冒頭でアイビーさん・しゅうせいさんも語っていたように、意見を言うときと反感を買ったり、場の和を乱したりするのではないかと不安がる生徒は、現在でも少なくない。そのような意見に批判という考えで学校生活を送ってきたとしても、受験や就職活動の面接の時だけ「あなたの意見は？」と問われるのだから、問題の根深さを感じてしまう。

書くことにしても、自分が本気で意見を交わしたい対象や、語るべき目的のない作文は、意見を吟味する力をかえって減退させる。私が受け持った生徒のなかにも、感想文・意見文・小論文といった外から押しつけられた作文課題に抵抗感を抱く者が少なからずいた。話を聞いてみると、案の定、課題提示時に対象・目的が明らかにされておらず、そのうえフィードバックも不十分だったようである。このような苦い体験をした生徒からすれば、自分で対象・目的を選択し、主体的に発信できるSNSのほうが、よほど有意義でおもしろく感じるのだろう。そうすると、いよいよ学校という限られた空間で意見を交換し合う意義はどこにあるのかということになる。

この問いについて考えるヒントを得た体験がある。中高併設型の一貫校で、国語科教育にあたったときのことだ。授業を通じて、自由に意見を言い合う機会を何度も設けたとき、なぜか学年が上がるにつれて、生徒が授業中に意見を交わす回数が減ってくることに気づいた。生徒が無気力になったわけではない。授業の中で展開される議論のテーマや時間帯が一局に集中してくるのである。

中学時代にはこちらがどんなボールを投げてでも食いつき、議論に持ち込もうとしてきた集団が、上級生になるにしたがって授業の大きな流れをつかみ、ここぞという議論の決め球にだけ反応する集団に育っていく。これは、生徒が教員から与えられるまま従順に取り組むのではなく、いったん自分で意見を吟味できるようになったからなのだろう。

エッセイ

意見文の書き方や方法論はいつでも学習することができる。でもそれだけでは意見を吟味することはできない。まずは対象と目的を意識しながら、自分が本当に興味・関心のある課題について意見をまとめ、他者と交換し合う喜びを知ること。さらには、議論の流れや方向性を確認しながら、言うべき時にきちんと主張できる訓練を重ねること。

これは学校の枠を飛び越え、生涯のテーマにもなりうる大きな課題である。